

りました。
五月、「世界の果ての通学路」という映画を観ました。
文字通り「世界の果て」の、「通学路」とも呼べない路を行く子供達を追った、ドキュメンタリーです。登場する四組の子供達の通学路は、野生動物が生息するケニアのサバンナ(片道15キロ・2時間)、南米パタゴニアの山々と平原(片道18キロ・馬で1時間半)、モロッコのアトラス山脈(片道22キロ・4時間・全寮制の学校で、月曜日の朝通学、金曜日の夕方帰宅)、インドのベンガル湾沿いの漁村(片道4キロ・足が不自由な兄の車椅子を二人の弟が押して1時間15分)。彼らは、毎朝、決死の覚悟で学校に向かいます。なぜそこまでして学校に行くのでしょうか。私はそこに、学びことの原点を見た気がしました。

思い、それが脈々と生きていくところに伝統の力を感じています。思えば、教員になって以来、ご指導いただいた先生方の中には、たくさんの一高の卒業生がいらっしゃると思います。今、ここに自分がいることを誇りに思いつつ、できることを誠実に、学び続けていきたいと思っています。

下館一高に赴任して

小島 明



四月に伝統ある下館第一高校に赴任し、一年生の担任、部活動はサッカー部の顧問をさせていただきます。気持ちのよいあいつで朝を迎え、何事にも一生懸命に取り組む生徒たちと過ごしていると、時間が過ぎるのが早く感じられます。入学式後の保護者懇談会では、親身になって生徒

と関わりますと話をさせていただきますました。生徒にとって一度きりの高校生活です、で、悔いが残らないように、また、私自身もやってあげばよかったと後悔することがないように、過程も大事ですが結果も出してあげられるような指導をしていきたいと思っています。体育教諭ですので、スポーツの楽しさや、チームワークの大切さ、勝ったときのうれしさや負けた時の悔しさを感じてもらい人生に役立てていただければと思います。勉強に關しても、受験は団体戦だと思っております。誰一人挫折することなく、時には助け合い切磋琢磨しながら日々過ごしてもらいたい。そういう雰囲気作りの一端を担えればと思っております。一所懸命努力いたしますので、今後ともよろしくお願いいたします。

「当たり前」に感謝

田崎 聡子



てくれている人が必ずいるはず。それに気づくことの大切さを、館一生との日々は改めて私に教えてくれていきます。生徒のみなさん、ありがとうございます。

当たり前前を過ごせることに満足しすぎず、そして感謝しながら、この伝統ある下館一高で私にできる限りの力を尽くしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

下館一高に赴任して

久保 綾子



四月から、下館一高での新しい生活が始まりました。教員生活六年目、初めての移動ということもあり、四月一日に校門をくぐったとき、新しい学校でのスタートを実感し、身が引き締まる思いでした。

赴任早々、一学年の担任をさ

せていただくことになり、数日後には入学式で新入生を迎え、分からないこともたくさんある中で、不安で心配な気持ちが大抵なくなりました。しかし、すれ違いう館一生徒の挨拶に元気づけられました。大きな声で、笑顔で挨拶、その姿がとても凛々しくたくましく見えました。見えない力で背中をぐっと押していたいただきました。勉強にも部活にも一生懸命、館一生の魅力にすっかり魅了されたと同時に、この伝統を一年生にしっかり伝えていこうと思いました。

高校三年間は、社会に出るための準備期間です。これから進学、就職と人生における大切な選択をこなしてはけません。その時必要なのは、知識、経験、人間力、人脈などといった「ツール」です。それらのツールを得るために、多くのことを学び、経験し、成長していく三年間を大切に過ごしてほしいと考えています。皆さんの成長のサポートが出来るように、私自身も共に努力し、成長を続けていなくてはと思っています。よろしくお願いいたします。



下館一高に赴任して

山田 貴大



四月に赴任しました山田貴大と申します。三学年副担任、担当教科は数学です。伝統ある下館一高に赴任し、身の引き締まる思いです。赴任してすぐ、たぐさんの先生方から、「下館一高の卒業生なんだよね？」と声をかけていただきました。私は卒業生ではありませんが、ご期待に応えられず申し訳ない気持ちになつたのを覚えています。下館一高の歴史や伝統を知り、早く下館一高の力になりたいと思います。よろしくお願いいたします。

四月から下館一高で過ごしてきて感じたことは、生徒の皆さんが何事にも一生懸命であるということです。授業や部活、学校行事など、どんなことにも手を抜かず努力する姿を見て、いつも感心しています。

ます。皆さんはバタフライ効果という言葉を知っていますか。「ブラジルで蝶がはばたくと、日本で竜巻が起る。」通常ならば無視できるレベルの小さな差異が、やがては大きな差になるという現象を、バタフライ効果と呼びます。人生は選択の連続だと思えます。毎日の小さな選択が十年後、二十年後の自分に大きな変化をもたらすかもしれません。三年間の高校生活、選択に迫られることはたくさんあるでしょう。まあいいかと思わず、悩んで悩んで悩みぬいて、自分にとって正しい決断ができる人になってほしいと願っています。

下館一高に赴任して 阿部 友樹



私が「学校の先生」となつてから、早いもので一年が過ぎようとしています。県南の守谷市出身の私にとって、下

館は常総線の駅名としてのイメージは少なく、一体どんな土地でどんな生徒たちとの生活がはじまるのだろうと、期待と不安が入り混じった心境で昨年の四月一日を迎えました。しかしその予想は良い意味で裏切られました。はじめ顔を合やす自分に対して、元氣よくにこやかにあいさつをしてくれる生徒たち。あれから月日が経ちすっかり顔なじみとなった今でもそれは変わりません。毎朝を気持ちよいあいさつで迎えることができ、学ぶ意欲にあふれた生徒たちと過ごす時間は、これ以上なく充実しております。生徒たちの「今日は何をやるの?」「何を教えてくれるの?」という期待に満ちた眼差しに応えるために、こんな授業がいいか、あんな授業がいいかと悩みつばなしの毎日ではあります。このような素晴らしい生徒たちへ授業ができることに大きな喜びを感じています。

生徒はみな好奇心の塊です。一人の例外もなく自らの興味に素直であり、そんな彼らに好奇心の琴線に触れられるのが、理科教員としての力を問われていたと感じます。生徒が身の回りのたくさんの中に興味・疑問を持ち、そしてそれらに果敢にチャレンジしていく姿を後押しできるよう、未熟者ではありますが力いっぱい努めてまいりたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

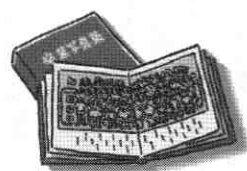
下館一高に赴任して 藤江 真理子



生方と生徒が一線を画しながらも、互いを信頼し合うという気持ちのよい関係を目にし、私も早くその中に加わりたいと思ったものです。

また、保護者会で、ある保護者の方から、祖父母の代から三代、下館一高の卒業生だというお話を伺ったことも印象的でした。家族や地域の皆様から「下館一高」が愛されているという九十年の伝統の素晴らしさを感じるとともに、それが生徒の「誇り」となっているのだと納得できました。

さて、この原稿を書いている現在はもう十一月。センター試験をあと一か月後に控えています。今は私も「下館一高」の一員として、生徒たちと一丸となつて精一杯の努力をし、生徒の皆が卒業式を笑顔で迎えられるよう、力を尽くしたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



下館一高に赴任して 小林 剛志



人生には決して忘れられない幸せな瞬間が訪れるが、本校へ来てほしいとの連絡をいただいたあの電話の嬉しさは決して一生色褪せることがない。

「なぜ人間は語り尽くせることを超えて、相手と想いを交わすことができるのか」「なぜ人間はたった一人ではできないことを、仲間と共に成し遂げることができるのか」という2つをテーマとして大学院博士課程で探究し、郷里の公立学校教諭職を経験しながら、青春を駆け抜けてきたが、本校の温かい人柄、そして穏やかかつ情熱的な夢のあふれる毎日に包まれた日常ほど幸せを実感できる日々はじめてである。日頃一緒に過ごして頂いている先生方、生徒たち、ご家庭をはじめとする

本校関係者に心より御礼申し上げたい。私は本校でお世話になっている方々が大好きである。

よい学校とはどのような学校かという問いに対して答えることは容易である。すべての生徒が、日々固有名で語られる学校である。生徒における学びの様子や生徒自身がその日に感じていた喜びや不安や葛藤など、青春を精一杯懸命に生きているまるごとを、

本校の先生方は表情豊かに語り合っている。そして、先生方においても自分の在り方や同僚とのチームとしての連携について心を砕き、驚くほど誠心誠意生徒と向き合い、時には生徒と肩を組み、時には生徒に感動を与えながら生き生きとされている。それでいて、ご自身の家庭も大切にされていらっしゃる、愛情がこちらにもひしひしと伝わってくる。憧れである。

本校にはウィジョンがある。夢がある。生徒がなりたい自分になれるように、また、なりたい自分を見つけれられるように、全力で支えていこうとする強い意志がある。私も憧れの先生方、一目置くことが

報 西 会 紫

実にたくさんある生徒たちと共に、芸術科を担う教員として、気持ち新たに青春を駆け抜けた。仲間と共に全力で走る喜びを味わっていきいたい。どうぞ末永くよろしくお願ひ申し上げます。

下館一高に赴任して

関本啓志

(第八十二回卒)



下館一高に赴任して、早いものでもうすぐ一年が過ぎようとしています。一年前、久しぶりに母校の門をくぐったとき、下館一高の変わらぬ雰囲気と活気が気がつきまし

た。そのとき、館一とその歴史を作っているのは、この学校に関わる人たちののだなあと感じました。私は非常勤講師として、この一年間その一員であることに誇りを持ち、勤務してまいりました。

私は週に一日だけの勤務で

あり、館一に関わる時間は少なかったかもしれません。しかし、活気にあふれ意欲ある生徒たちと関わることができたことや、熱意ある先生方との交流を通して、少ない時間でも多くのことを得られた時間となりました。私の人生のなかに価値ある時間を刻むことができました。

生徒のみなさんは今をどう過しているのか。3年という月日は長いようであつという間です。高校生の時間は、勉強や部活などに費やすことが多いと思います。問題に直面したらそのために努力する時間は無駄ではありません。経験や知識、感性を磨くための時間を惜しまないでください。将来、過去になった今を振り返ったとき、価値があったものだと思えるように。

最後に、みなさんの大切な時間に関われたことを感謝しています。微力ながら、これからも皆と価値ある時間をつくれるよう頑張っていきたいと思っています。



下館一高に赴任して

小蘭江 秀行



「異動先、下館一高になったから。」

連日、日付を跨いでの業務処理に疲弊しきっていた、前勤務先三年目の三月。

「今年は絶対に異動したい」の想いに応えてもらい、二つ返事で了承しました。

晴れて異動となり、過去の学校勤務の記憶を頼りに仕事をしつつ、初めて在校生が登校となった四月四日。

「おはようございます。」挨拶されました。それも事務室に着くまでに何人からも。

新任職員であつたと予測はできても、現時点で意識がない以上挨拶しなくても不思議ではない、というより以前勤務した学校では、挨拶されること自体が稀だったので、正直驚きました。その後も生徒諸

君の生活態度を見ると、職員だけでなく来校者への挨拶や清掃等が習慣づいていると感じました。また、校内備品に異状があつた際や誤って破損してしまった際に、自発的に報告してきたときは、事務職員として感動すら覚えしました。

自分は社会人となって十数年、様々な人と関わり仕事をしてきましたが、「仕事ができる人」は総じて挨拶や連絡、報告そして直接仕事とは関係ない雑事もそつなくこなしていました。あたりまえのことと思えるかもしれませんが、仕事に忙殺されているときに日常と変わらず行うことは、なかなか困難となります。それらが習慣となつている下館一高生とて、数年後、社会人となつてからの強みになると思います。

この文章を書いて、そんな下館一高生が快適な学校生活を送れるよう環境整備に努めようと思うとともに、日々乱雑になつていく机を見て見習わなくてはとも思いました。事務室にいるとなかなか関わる機会はありませんが、これからよろしくお願ひ致します。



進路指導の現状

〜難関大である東京外大、東北大、北大に合格〜

進路指導部長 深谷 祐



【25年度卒業生入試状況】

①進路状況：二〇一四入試年度

	卒業生数	男子	女子
国公立合格	68名	137名	139名
前期合格	33名	31名	
中後期合格	23名	5名	
推薦合格	12名	11名	
私立合格	219名	323名	

今年度は国公立の中後期合格者と女子合格者が増えまし

た。例年、国公立合格者のほとんどは前期合格でしたが、今年は後期までチャレンジを続ける生徒が多く、結果として男子二三名女子五名の合格者が出ました。ここ十年間で最多の合格者でした。最後まで努力を続けた生徒の皆さんに敬意を表します。また、女子の国公立合格者が大幅に増えました。来年に続けたい良い傾向です。

②センター試験

2014年度のセンター試験は参加大学が八四三校と過去最高であったのに対し、志願者は五〇六七二人と大きく減少し、現役志願者も四四三三一人と平成の最低数を記録しました。また、来年度（二〇一五年度入試）から新課程入試が一部前倒しで始まる（理科と数学の選択方法及び出題項目が変更）ため、浪人を避け、現役合格を目指す傾向が顕著でした。志望校は数年来の理高文低に加え、合

格確実な中堅以下の大学に受験生が集中しました。全国一の志願者を集めたのは近畿大学でした。理系で中堅、しかもインターネットからもスマホからも出願可というネット出願の便利さが功を奏し、十万人超の受験生を集めました。ネット出願は今急速に広がっています。

本校生のセンター試験結果は国語平均一〇五・六、数ⅠA六三・六、数ⅡB四九点、英語一二四、世界史B六三・七、日本史B六四、地理B六七・一、物理I五五・四、化学I六二・二、生物I五二・二、リスニング三三・八。特筆されるのは国語。古文分野に源氏物語が出題されたことで、全国平均が九七・六と大幅に下がった中で、本校の一〇五・六点は光った。一方、偏差ではあるが世界史・日本史・地理・物理・化学・生物は全国平均に達しなかった。ここ数年の英数国の充実に比して理科社会の校内平均点は低下傾向にあるのが気がかりです。

③指導の取組

学年団は受験を生徒の人間

的な成長の場とするために何が必要かをよく話し合い、その時々指導テーマを共有して、指導を行いました。すなわち一年次・生徒の現状を把握した上での初期指導、二年次前半・家庭学習で量の確保が出来ているか、二年次後半・トップ層も伸ばす指導、三年次夏休みまで・学校行事を全うする、三年次受験直前まで・生徒の第一志望を親と教員が支える体制の構築、がその実践内容です。

【今後の展望】

文科省の諮問機関である中央教育審議会が十月二四日に文科省に出した答申によれば大学入試は、具体的な内容は専門家が検討を進めるとしながらも、①まず、生徒（大学入学希望者）は学力評価テスト（仮称）を受ける（年に複数回実施）②その後、大学の個別試験を受ける③英語はTOEFLなどの民間試験の活用も求められる④二〇二〇（平成三二）年度から段階的に実施という内容になっています。大学の個別試験は二〇一五年度（今年入試）から可能な大学で検討・実施

各学年の現状

一学年概況

一学年主任 高野良則

していくことになっています。「一点刻みから総合的評価へ」というスローガンで進められている入試改革により、今後本校でも何らかの対応は必要になると思われま。しかし、生徒の高いモチベーションと質の高い授業、そして活発な部活動・課外活動は本校の教育活動の根幹です。この『不易』の部分で大事にしながら変化に立ち向かいたいと思います。

四月八日（火）暖かく晴れた日に入學式を迎え、現一年生は下館一高生となりました。様々な中学校から来た級友や授業をなど、新しい高校生活に戸惑いながら、四月終わりに各クラス毎に遠足へ行きました。それぞれが飯盒炊爨やバーベキューなどみんなで協力し合うメニューになっており、作業を通して徐々にお互い打ち解けていきました。クラスでおそろいのTシャツをつくり臨んだのは六月の

館力祭です。上級生のパワーに圧倒されながらも、一所懸命手を抜くことなく出来ました。高校生のイベントはこのような感じであることを思い知りました。

進路・学習に関しては、東大・東北大見学ツアー、筑波山学習合宿など大学への進学意識も高まりました。特に仲間と宿泊し、講義や自学を朝から晩までやった学習合宿は、やったものにしかわからない充実感とやる気につながりました。

夏休みも終わった九月には球技中心のクラスマッチです。館力祭では圧倒されていた一年生も球技会では先輩相手に健闘しました。ここでまたクラスの絆が強まりました。

十月には企業訪問、文理選択。この前入學したと思ったら、もう卒業後のことを考えなくてはなりません。そして十一月最後、ミュージカルモーツァルトに感動。自然とスタンディングオベーションを送っていました。

これを書いている今現在十二月、ここまであつたという間ですが、振り返ると様々なことがあり、また生徒も日に日